

質的分析方法による「社会福祉研究」および「実習指導」に関する研究

～岩手県立大学社会福祉学部と山口県立大学社会福祉学部の 教育研究に関する特色を踏まえた共同研究として～

藤田 徹

本テーマは、宛ら地図のない荒野を突き進む探検のようでもある。なぜならば、「社会福祉研究」においても「実習指導」においても、「質的分析方法」による成果は緒に就いたばかりだからである。確かに、グラウンデッド・セオリーやナラティブ・アプローチによる業績も散見されつつあるが、それを持って社会福祉領域の「質的分析方法」の全貌が詳らかになった訳ではないことはもちろんである。

そういう意味では、本テーマは、言わば、ひとつの実験にも似ている。特に、「社会福祉研究」の〈理論と実践〉および「実習指導」の〈教育と現場〉の“不幸なかい離”の解消へ向けた橋頭堡づくりを「質的分析方法」で目指す実験と言えるかもしれない。

さて、岩手県立大学社会福祉学部と山口県立大学社会福祉学部は、よく似ている。それは、名前だけではなく、県立大学としての使命感がそうさせるのか、組織や教員や学生の雰囲気もよく似ているように思う。その似た者同士が、数年前から学部間交流を持つようになった。当初は、教員間での資格教育など双方の共通課題を協議する機会として、また一昨年度から学生間での交流を交え、両校の親交が深められてきた。

そして、今回、似た者学部の似た者教員による共同研究が実現した。その似た者教員とは、「質的分析方法」を一つの研究アプローチとする面々である。山口県立大学の中村先生は〈現象学的社会学〉を、高木先生は〈グラウンデッド・セオリー〉を、岩手県立大学の藤田は〈エスノメソドロジー〉を分析方法のひとつとして研究を進めている。またそれとは別角度から、研究協力者として山口県立大学の水藤先生には、〈ソーシャルワーカーの養成教育における日豪比較〉を、岩手県立大学社会福祉学部のOBであり、現在、修紅短期大学に所属する白石先生には、〈相談援助実習の「理論と実践」の統合〉についてそれぞれ研究を進めていただいた。これらのメンバーによって、1年を通して、本テーマが取り組まれた。

まず、本研究の概略を説明しよう。はじめに『質的分析方法による「社会福祉研究」および「実習指導」に関する研究』をテーマに掲げた二つの理由について触れたい。

ひとつは、社会福祉士養成教育の高度化を目指した2007年度の制度改正が挙げられる。特に実習教育で

は、実習指導者及び養成校教員の資格要件等を含めドラステックな変更が行われた。その結果、実習プログラム等の対応など、養成校と実習現場との濃密な連携が求められるようにもなった。しかし、その一方で、目指すべき高度化の内実は、養成校、実習現場双方にとって、必ずしも具体的なイメージを思い描けているわけではない。

そして、これらの課題へ、まず「社会福祉研究」から、質的分析方法の「異化・相対化」（中村報告からの引用）を通じた「理論と実践」の実態化により、理論教育と実践教育の役割分担と連携の明確化を目指し、また「実習指導」から、実習生の現場へ向けた能力として質的分析方法を導入し、上記の「理論と実践」の統合を実践経験から果たすことで、養成教育の高度化へのメソッドを模索したいと考えた。

そして、もう一つは、岩手県も含む東日本地域の震災復興の一翼を担うソーシャルワーカーが直面する問題の重大性である。今後長きに渡り、ソーシャルワーカーは、被災の影響を受けたクライアントへ対応することになる。しかも、未曾有の大震災により、未だかつてない複雑な問題状況へ向き合うことが予想される。それらの課題へ「社会福祉研究」において、質的分析方法を通して「実践」を〈状況〉として捉え直し、「理論」を〈ツール〉として再指定化することによって、福祉現場にとって“使える知識”の提起を図り、また「実習指導」では、その“使える知識”による専門職養成の可能性を探り、より高度なソーシャルワーカーの能力開発を目指すことで、テーマへ結びつけたいと考えた。

以上の研究成果を報告書としてまとめた。内容は、全体を3つの柱で構成している。一つが〈質的分析方法による社会福祉研究の新たな展開の可能性〉を柱とした「1. 中村報告」と「2. 高木報告①」「3. 藤田報告①」であり、二つめは〈質的分析方法の「実習指導」上の教育方法に関する有効性〉を柱とした「4. 藤田報告②」「5. 高木報告②」であり、三つめは、〈相談援助教育の比較研究〉を柱とした「6. 水藤報告」「7. 白石報告」として構成している。具体的な内容については、報告書に譲る。以上、終了報告としたい。